

棚田学会通信

第58号 目次

特集 棚田と教育(Ⅱ)	1
日本の棚田百選紹介	7
事務局ニュース	8



特集 棚田と教育 (Ⅱ)



棚田に興味をもち、自ら主体的に関わっていこうと思うのが、大学の頃からだろう。特集「棚田と教育」の第2回では、とくに大学での活動を取り上げ、大学教員からの見方、学生からの見方、第三者からの見方、をそれぞれ紹介する。

(棚田学会編集委員会)

写真上：「別府大学 大分農業文化公園の4段の棚田 (田植え)」(提供：大坪素秋)

左下：「広島大学 教養ゼミ体験学習でのフィールド調査」(提供：細野賢治)、右下：「香川大学 水路掃除の様子」(提供：鈴木芳幸)

別府大学 夢米（ゆめ）棚田プロジェクト

別府大学食物栄養科学部発酵食品学科 教授
大坪 素秋

本学は、大分県北部の国東半島の付け根の別府市内にある3つの学部と短期大学部からなる大学で、別府八湯のなかの『別府地獄めぐり』で有名な鉄輪（かんなわ）温泉の近くに位置しています。別府の棚田といえば『日本の棚田百選』にも選ばれた内成（うちなり）棚田が有名ですが、県の他の地域と同様に水田や棚田は減少傾向にあり、以前は大学の周辺にあった多くの水田や棚田も住宅に変わってしまいました。

『別府大学夢米（ゆめ）棚田プロジェクト』は、学生に農業への関心を持ってもらい将来に渡り県下の棚田を守る活動を推進することを目的とし、別府大学の学生と先生が設立した農業体験に取り組むサークルで、今年で10年目を迎えます。大分県からの支援により、大学からバスで30分ほどのところにある大分農業文化公園（写真1、大分県杵築市）の公園内に4段8aの棚田を復元整備して、棚田でのフィールドワークにより米作りを行ってきました（表紙写真）。



写真1 大分農業文化公園

2013年5月に国東半島宇佐地域が、国連食糧農業機関FAOから『クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環』として世界農業遺産に認定されてからは、昼表などに使われる国東半島特産の七島藺（シチトウイ）の棚田での栽培（写真2）、七島藺の工芸品作りとPR活動にも挑戦し、棚田で育てた古代米の一種の香り米（ヒエリ）を使った本格焼酎夢香米（ゆめ）を学生のアイデアで開発し販売するなど6次産業化にも取り組んできました。

別府大学では、この『別府大学夢米棚田プロジェ

クト』を基礎として、2015年から『世界農業遺産体験学習（当初2単位、現在4単位）』という教養科目の授業を開講して、座学とフィールドワークを組み合わせて、農業と歴史、食糧需給、生物多様性と環境問題などに関して学び、伝統的な農業の次世代への継承、中山間地域の農業の活性化、国東半島宇佐地域の世界農業遺産の有効活用といった大分県の農業が抱える課題の解決に学生が取り組んでいます。



写真2 七島藺の収穫

棚田サークルのリーダーで、醸造が専門の発酵食品学科の学生が企画・開発した本格焼酎夢香米の誕生は、その成果といえます（写真3）。



写真3 本格焼酎夢香米（ゆめ）

『農業を知る（発見）、農業で遊ぶ（参加）、自然と親しむ（癒し）』をテーマとしている大分農業文化公園の棚田を活動の場としている本活動ですが、大学から公園まで往復で1時間ほど移動の時間が必要なため、主に日曜日と祭日に活動を行っています。国際優秀ツバキ園として知られる大分農業文化公園は、2001年に開園し敷地面積は約120haに及ぶ県立の農業公園で、様々な農業体験が可能な施設が設置されており、棚田活動以外にも大学の授業でハーブガーデンでの実習にも利用させてもらっています。このような素晴らしい農業体験の場が大学の近くにあり、公園の職員の方々のご指導の下自由に利用することができるお陰で本活動は成り立っています。

近年、共同作業が必要な農業体験に関心を持ってくれる学生が減少する中で、棚田サークルでリーダーとなって熱心に活動してくれる学生たちの成長を目にするにつけて、棚田を守ると同時に学生の気づきとやる気そして成長を促す本活動を今後さらに発展させていきたいと考えています。

広島県井仁の棚田での活動

広島大学生物生産学部 准教授 細野 賢治

井仁の棚田は、広島県山県郡安芸太田町にあり、「日本の棚田百選」に広島県で唯一選出された棚田である。太田川上流に位置し、標高450m～550mに324枚の棚田が存在し、耕地面積は8haである。室町時代後期からの石積の棚田もあり、2015年にはアメリカのテレビ局CNNが「日本の最も美しい場所31選」に選んだことで有名である。井仁集落の交流活動は、田植えと収穫の年2回の棚田体験会のほか、棚田オーナー制度や元地域おこし協力隊員が開設した常設の棚田カフェなどがある。

広島大学では、社会経済農学分野である食料生産管理学研究室が核となって2010年から井仁での活動を開始した。当時、安芸太田町では「未来戦略」策定の一環として、集落ごとにマスタープランを作成することになっていた。そこで、研究室教授であった山尾政博広島大学名誉教授の発案で、自治会長であった河野司さんのご配慮により、井仁のマスタープランづくりに当研究室が関わることとなった。まず、研究室学生が中心となって、ヒアリングによる住民意向調査や棚田体験会参加者の都市農村交流に対する意識調査などを行った。そしてこれらの集計

結果をもとに自治会役員と学生、院生および教員とでワークショップを複数回開催し、マスタープランを煮詰めていく作業を行った。これらがきっかけとなり、井仁と研究室との関係は10周年を迎えた現在も続いている（写真1）。



写真1 大学祭で行った井仁とのコラボマルシェ

いまでは、毎年2回の棚田体験会に広大生がホスト側として参加している。また、農村調査を快く受けてもらい、井仁を題材とした研究は、この9年間で卒業論文が4本、修士論文が2本、院生の学会誌論文が1本、院生・教員の学会報告が4本となった。そして、生物生産学部の教養ゼミ体験学習（表紙写真）および地域連携インターンシップを受け入れてもらい、のべ約100人の学生が井仁の皆さんから直接指導を受けた。さらに、タイ・カセサート大学からの短期交換留学生のべ約30人も井仁で農村体験学習を行った。これらの活動費用は、総務省や広島県の補助事業を活用して安芸太田町役場から助成を受けている。これらの活動を通じて、井仁の皆さんと「広大生」ではなく「〇〇くん、〇〇さん」といった固有名詞で会話するような関係ができた。このような関係性の構築は、広大生を自分の子どものように温かく受け入れてくださった井仁の皆さんの心の広さがなければ成し得なかった。

井仁での活動を通じて育った学生の多くは、卒業後に地域に根ざした仕事に就いている。農協職員や研究員、国、県、市町村の公務員などに就いた卒業生は、机上だけでなく地域社会の現場で実際に起こる諸問題に視点を置いて職務を遂行しているという。新聞記者になった卒業生は、農村での何気ない暮らしの一コマを描いた記事が好評である。大学教員になった卒業生は、大学所在地近辺にある棚田集落に学生を連れて体験学習を行っている。なかには、ミャンマー人留学生が自国に帰って政府高官となり、食料政策立案の中心的存在となったケースもある。

ところで、今年も6月2日（日）に井仁の棚田体

験会・田植えの部が開催され、広大生 10 人がホスト側として参加した（写真2）。終了後の反省会で、井仁の皆さんから「いま、広島県職に就いた〇〇さんと一緒に農業振興の仕事をしています」、「〇〇さんが書いた新聞記事を見つけるのが毎日の日課です」といった話が聞かれた。また、初めて参加した学生が「これからも長く井仁と関わりたいです」と発言していた。今後も井仁の皆さんの心の広さに依拠しながら、地域に根ざした教育・研究活動を続けていきたい。



写真2 棚田体験会・田植えの部

香川が誇る小豆島千枚田 香大生と地域との結びつき

香川大学農学部3年 棚田の会代表 鈴木 芳幸

棚田の会は香川大学農学部の学生約 30 名から成る学生団体で、棚田や地域の伝統文化維持と美しい棚田の広報を目的に、主に小豆島中山地区（写真1）の千枚田で活動を行っている。



写真1 小豆島中山千枚田の風景

2013年に実施された初年度の SUIJI-SLP にて、学生の手で棚田の美しい景観の維持に貢献することは

できないかとの考えに至り、棚田の会は発足された。SUIJI-SLP とは、インドネシア3大学（ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌディン大学）と四国3大学（愛媛大学、香川大学、高知大学）が連携して実施しているサービスラーニングプログラムである。プログラムでは両国の学生が2週間にわたって農山漁村に滞在し、現実の課題に取り組む。香川大学が担当している SUIJI 国内 SLP 小豆島サイトでは、学生は小豆島中山地区に滞在し、例年地域の方々との交流や棚田での稲刈り（写真2）を通じて、持続可能な発展のあり方について学びを深めている。



写真2 稲刈りの様子

そのような SUIJI-SLP を起点として発足された棚田の会は主に、棚田での耕作、伝統文化維持、中山の棚田の広報の3点の活動を例年実施している。

棚田の会の活動の主軸として我々は棚田の一部をお借りし、餅米の栽培を行っている。その他にも棚田へと水を供給するための全長 4 km に及ぶ水路の掃除（表紙写真）や、耕作放棄地を全国の一般の方々に貸し出す小豆島町の事業の進行補助にも参加している。



写真3 中山農村歌舞伎の様子

小豆島中山地区では、松明をかざしながら棚田のあぜ道を歩き豊作を願う虫送りや、島民の手によ

て毎年開催されている中山農村歌舞伎といった、江戸時代から続く歴史の深い伝統文化がある（写真3）。我々は活動を行う中で、松明の作成や農村歌舞伎への出演を通じて、伝統文化の維持に関わっている。

棚田での耕作を通じて収穫した餅米は、香川大学農学部の収穫祭や大学周辺の催子の際に、餅や赤飯として配布している。また、その際に中山千枚田などについて記載されたパンフレットの配布やアンケート調査をし、広報活動に繋げている。

それらの活動を通じ、我々は持続的な棚田維持への働きかけを行っている。特に、水路掃除は人手を必要とする重労働であるため、学生が参加することは助かっていると、地域の方からのお声を頂いている。また、我々の活動では棚田での耕作や地域の方々との関わり合いといった、貴重な経験を得ることができるため、参加する学生にとっても有意義なものとなっている。

小豆島中山地区の棚田で耕作を行う我々の活動は、地域の方の多大な協力のもと成り立っている。団体の現状として、学生が頻繁に中山へと訪れることが難しく、活動は月に二回程度となるため、日々の手入れは地域の方にやって頂く必要がある。そういった我々の活動進行に従う地域の方への負担を、いかに減らせるかが今後の課題となっている。

**能登とフィリピン・イフガオの棚田をつなぐ
—棚田学会と JICA のコラボ・セミナー—
農林水産省農村振興局設計課 田中 卓二**

2019年1月10日(木)、東京麹町の JICA 本部で、能登の里山里海とフィリピン・イフガオの棚田をつなぐ草の根事業の事例を中心に、条件不利地対策と地方創生を考えるセミナーが開催されました。

この企画は、棚田学会と JICA 農村開発部のコラボによって実現したものです。棚田学会員や JICA 本部、農林水産省からの参加者のほか、JICA 北陸などの国内拠点、JICA フィリピン事務所などの海外事務所からも TV 会議システムで参加者がおり、30名程度の出席がありました。

司会進行は、JICA 農村開発部国際協力専門員の仲田俊一氏が行い、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の関口広隆氏によるイフガオの棚田保全の取組の紹介の後、金沢大学名誉教授の中村浩二氏より、能登とイフガオの人材育成と相互交流による連携活動について基調講演が行われ、最後に、棚田学会会

長の山路永司氏のコーディネートでディスカッションが行われました（写真1、2）。



写真1、2 セミナーの様子

（写真2の画面右側には、JICA フィリピン事務所など海外事務所と TV 会議の様子が映し出されている）

フィリピンのイフガオの棚田は、1995年に人と自然との共同作品ともいえる文化的景観が評価されユネスコにより世界遺産登録され、2011年には、FAOにより世界農業遺産（GIAHS）にも認証されています（写真3）。



写真3 イフガオ・バタッド棚田

しかしながら、若者の都市への流出、無秩序な観光開発等により、休耕・放棄田の増加や棚田の景観

の劣化が進み、2001年に「世界危機遺産」に指定されたほどです（現在は指定解除）。

一方、白米千枚田で有名な石川県能登地方は、自然との共生や持続的発展をしてきたグローバルな先進モデルと位置づけられ、「能登の里山里海」として2011年に世界農業遺産に認証されています。しかし、過疎化・高齢化により里山の荒廃、伝統文化の継承が危惧される状況があり、金沢大学では、これを打破するため、石川県など行政や民間とも連携して、2007年、将来の農林水産業と地域を担う若手の人材育成を行う「能登里山マイスター」養成プログラムを立ち上げました（2012年からは「能登里山里海マイスター育成プログラム」として実施中）。

小学校の廃校を利用して2006年に設置された金沢大学「能登学舎」（写真4）を拠点とし、若手ポスドク教員等による現地駐在教員も配置し、2年間個別指導を含む多様なカリキュラムによる人材育成が行われ、すでに165名*の里山里海マイスターが活躍しています。



写真4 珠洲市の廃校の小学校を活用した「能登半島 里山里海自然学校」（2006年10月開校）

この成果を踏まえ、2014年からJICA草の根技術協力（地域経済活性化特別枠）事業により、若手の流出など能登と同様の課題に直面しているフィリピンのイフガオの棚田の持続的発展のための人材養成プログラム構築支援事業がはじまりました（2017年からは、拠点強化・相互交流活性化を図る第2フェーズとして実施中）。

日本側は金沢大学と石川県等、フィリピン側はイフガオ大学とイフガオ州等、大学と自治体が連携してイフガオ大学に「イフガオ里山マイスター」の養成プログラムを設置し（写真5）、大学・自治体の相互交流やフィリピン・日本での研修等（写真6）を通じて、能登とイフガオを担う若手人材を育て、

両地域の持続的発展を目指すものです。



写真5 イフガオ里山マイスター養成プログラム設立記念式典（2014年3月）

すでに66名*のプログラム修了生が誕生し、棚田米からのライスワイン醸造や棚田でのドジョウ養殖などイフガオの活性化に取り組んでいます。



写真6 2015年度金沢・能登研修

セミナーでは、これら能登・イフガオに関する取組の紹介の後、会場を巻き込んだディスカッションが行われ、能登・イフガオにおける棚田を活用した観光地化や活性化について白熱した議論が行われました。中村名誉教授のイニシアチブの下、金沢という地域を飛び出して、地元の能登の活性化だけでなく、フィリピン・イフガオとの国際交流、若手人材の育成までつなげたこの取組は賞賛に値するものと思います。

条件不利地である棚田地域を持続的に発展させていくことは、日本でもフィリピンでも難しい課題ですが、地域を担う若手人材の育成により拓けていく未来があることを強く感じさせられたセミナーでした。

（※1月末時点の数字。3月末時点では、能登183名、イフガオ81名に増加。）

日本の棚田百選紹介

宮崎県西米良村「春の平棚田」、「向江棚田」

宮崎県西米良村農林振興課 課長補佐 河野 晃教

〔はじめに〕

西米良村は、宮崎県中央部最西端に位置し、九州中央山地国定公園に編入されている市房山、石堂山をはじめとした山々を源とする清流一ツ瀬川の最上流域を占めています。

村の総面積は 271.51km²で、その 96%が山林原野で占められ耕地は僅か 0.4%であり、残り 3.6%が宅地や道路、ダム湖等に利用されています。

人口約 1,100 人の県内では最も人口の少ない自治体で、65 歳以上が占める割合になる高齢化率が 42%となっています。

産業基盤は農業と林業が一体となった複合経営が中心ですが、自然的・地理的条件等不利な要素が多い中、生産者の高齢化や担い手不足が重なり、農業経営は厳しい状況になっております。

またイノシシやシカ、サルなどによる鳥獣被害は依然として発生しておりネットや柵などによる対策は農業を営む上で必要不可欠な状況となっています。

村の特産品としては、ゆず、カラーピーマン、ほおずき、椎茸等で少ない農地を有効に活用するため生産を振興している作物です。

水稻は、普通期栽培でほとんどの農家が自給的な生産を行っており、収穫の際は、昔ながらの稲架掛けによる自然乾燥が行われ、農村の景観を呈しております。

村内、あちこちに見られる棚田ですが、平成 11 年に 2カ所の地区が棚田百選に認定されています。

「春の平（はるのひら）棚田」

村の中心部より約 3 km 離れた竹原地区にあります。一ツ瀬川沿いに石積みによる水田が 67 枚あり、合計面積が約 3.6ha となっています（写真 1、2）。

この棚田は、大正時代に地区の振興を図るため地区住民一体となった開墾事業により築き上げられており、現在でも地区に共同一致の精神が残っています。

また、開墾の際に多くの巨岩が出土したため、岩を砕き石垣に使用するとともに、地区のシンボルと

なる公園の整備を行っています（写真 3）。



写真 1、2 春の平棚田

現在、中山間地域等直接支払制度に取り組んでおり、農道や水路等の共同管理を行っています。農家の高齢等が進むなか、遊休農地は出ておらず地区住民による農地の保全が行われています。



写真 3 竹原公園石造

「向江（むかえ）棚田」

村の中心部より約 5 km 離れた上米良地区のこちらも一ツ瀬川沿いに位置しており、石積みによる水田が 61 枚あり、合計面積が約 3.2ha となっています（写真 4）。

開発起源は奈良時代と言われており、大小さまざまな石を積み上げて作った石垣は高いところでは約 5 m あり先人達の努力により築き上げられた棚田になります。



写真4 向江棚田

【今後について】

農家の高齢化、担い手不足については、今後も課題として残りますが、先人が苦勞されて築いた棚田を後世に継承していくため対策を引き続き検討していきます。

速報：「棚田地域振興法」制定

棚田地域の保全を目指す棚田地域振興法が6月12日の参院本会議で可決、成立しました。

人口減少や高齢化で荒廃の危機にある棚田の保全が目的であり、国は都道府県の申請に基づいて棚田地域を指定し、活性化の事業を進めることとなります。

振興法は棚田を「貴重な国民的財産」と位置付け、国は振興の基本方針を策定し、実施する事業を毎年度公表し、市町村は指定された棚田地域に振興協議会を作ることができるようになります。

公布から2カ月以内に施行されます。法案は超党派でまとめ、今国会に提出されていました。

※詳細は、次号に掲載予定です。

事務局ニュース

◎棚田学会創立20周年記念シンポジウム

「棚田の文化的価値」開催のお知らせ

趣旨文（抜粋）

食糧生産の場である棚田に、水源涵養や国土保全の機能とともに、文化的な価値を見出すようになったのは、1990年代半ばのことである。

1999年に「姨捨（田毎の月）」が名勝に指定され、同年、農林水産省は「日本の棚田百選」を認定した。そして、2004年の改正文化財保護法は、棚田景観から着想された「文化的景観」を創設した。現在では世界農業遺産なども含め、文化財としての棚田の指定・選定が広く行われている。

今年創立20周年を迎えた棚田学会も、棚田の文化的な価値を、社会に知らしめる役割の一端を担ってきた。「棚田の文化的価値」が認められるようになって四半世紀、そして改正文化財保護法から15年にあたり、この施策の意義について、今後の棚田学会が棚田の保全のために果たしていくべき役割とともに考えてみたい。

・日程 2019年8月3日（土）

・会場 東京大学山上会館（本郷キャンパス）

2階大会議室 東京都文京区本郷7-3-1

12：00 棚田学会賞表彰式・受賞記念講演

13：00 開会挨拶：山路永司 棚田学会会長

13：20 棚田学会創立20周年記念講演

・本中 眞氏（元内閣官房内閣参事官）

「文化遺産としての棚田の顕彰と保護

—その25年のあゆみ—

14：30 事例報告

・竹下伸一氏（宮崎大学農学部准教授）

「新旧の農業が混じり合う

山村の棚田文化」

・植野健治氏（平戸市役所文化財部）

「平戸島における棚田の保全と

地域文化の継承」

・関口広隆氏（日本ユネスコ協会連盟）

「フィリピン・イフガオの棚田と先住

民の民の知識—継承と棚田文化保全」

15：50 総合討論

コメント：千賀裕太郎氏

司会：小谷あゆみ氏

17：00 閉会挨拶

安井一臣（棚田学会副会長・研究委員長）

17：30 懇親会 四季郷土料理かどや 山上亭

（東京大学山上会館）

主催：棚田学会 後援：農林水産省

【編集後記】

社会に羽ばたく前の大学。将来の展望を考え上で重要な4年間である。この4年で、何を考え、疑問をもち、解決していこうとするのか。「棚田」から見えるものが、沢山あることに気付いてもらいたい。

（秋本洋子）

棚田学会通信 第58号 2019年6月30日発行

発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagakkai@gmail.com